

ハバクク書 1章1節～4節

「ハバククの疑問」

イントロダクション

1. はじめに
 - (1) 人生に起こる悲劇の問題
 - (2) 自然災害、犯罪、人災
 - (3) ホロコースト

2. ハバククという預言者
 - (1) 南王国ユダの預言者ということ以外に、詳しいことは分からない。
 - (2) この預言書は非常にユニークである。
 - ①普通は、神のことばを、民か敵に向かって語る。
 - ②この書は、「神との対話」の書である。
 - (3) そのテーマは、「地上における悪と罪の問題」である。

3. メッセージのアウトライン
 - (1) ハバククの第1の疑問
 - (2) 神の回答
 - (3) ハバククの第2の疑問
 - (4) 神の回答
 - (5) ハバククの祈り

このメッセージは、「地上における悪と罪の問題」について正しい理解を与えるものである。

I. 第一の疑問（1：1～4）

1. 葛藤
 - (1) 神の民ユダの中で暴虐が行われていた。
 - (2) 彼は、それに関して何度も祈って来た。
 - (3) しかし、神からの回答はなく、神は無関心を装っておられるようである。

2. 疑問：神はどうして民の罪をそのまま放置しておられるのか。
 - (1) 南王国ユダでは律法は実行されず、放置されたままになっていた。
 - (2) 悪者が正しい人を圧迫していた。
 - (3) 裁判においてはさばきが曲げて行われるようになっていた。
 - (4) 罪に対して敏感なハバククにとっては、見過ごしにできない状況にあった。

II. 神の回答(5~11節)

1. ユダを裁くための器が起こされる。

(1) ユダの暴虐を裁く器は、これまた暴虐を特徴とするカルデヤ人(バビロニヤ)。「異邦の民を見、目を留めよ。驚き、驚け。わたしは一つの事をあなたがたの時代に作る。それが告げられても、あなたがたは信じまい。見よ。わたしはカルデヤ人を起こす。強暴で激しい国民だ。これは、自分のものでない住まいを占領しようと、地を広く行き巡る」

(2) この時点では、バビロニヤは注目されることのない小国。

(3) それゆえ、この国が強国として登場することは、驚愕すべき出来事。

2. ハバ1:5は、使13:41に引用されている。

(1) その文脈では、福音のメッセージが驚愕すべき内容となっている。

3. バビロニヤの特徴

(1) 強暴で、自立した国

(2) 「自分自身でさばきを行う」とは、自らが神のように振舞っている様子。

(3) 非常に速く移動し、短期間の内に世界を征服するようになる。

(4) 「暴虐」が彼らの特徴。つまり、野蛮で暴力を振う民だということ。

(5) 戦略に長けており、いかなる要塞を持った国でも、容易に征服する。

(6) 「自分の力を神とする者たち」

①バビロニヤ人たちは偶像礼拝者

②その上に、自分の力を神とするという罪の上塗りをした。

(7) 自分の力を過信することが、最大の弱点となる。

①最終的にはその傲慢な態度のゆえに、神に裁かれることになる。

②「高ぶりは破滅に先立ち、心の高慢は倒れに先立つ」(箴16:18)

③「【主】を恐れることは知恵の訓戒である。謙遜は榮譽に先立つ」(15:33)

III. 第2の疑問(12~17節)

1. 信頼の告白(12節)

(1) ハバククは、イスラエルの民が完全に滅びることはないと確信している。

(2) その理由は、神と彼らの間に契約関係があるから。

(3) 聖なる神は決して約束を破ったり、契約を破棄したりする方ではない。

(4) 神は2つの目的をもってバビロニヤを立てられる。

①ユダを裁くため。

②ユダを叱責し、矯正するため。

*裁きのための裁きではない。

*バビロン捕囚以降は、偶像礼拝からは完全に抜け出す。

2. 疑問(13~17節)

(1) なぜユダよりも邪悪なバビロニヤを用いてユダを裁くのか。

①第1の疑問よりも重大な疑問である。

(2) この疑問は、20世紀のホロコーストに関する疑問と同じである。

「ユダヤ人が罪人であることは分かるが、なぜそれよりもはるかに罪深いナチを用いてユダヤ人を裁くのか」

(3) バビロニヤが漁師で、ユダの民は魚にたとえられている。

(4) ユダの民は、いとも簡単に捕えられ、バビロンに連行される。

(5) バビロニヤは、ユダの民を引きずり上げた網を礼拝する。

①自らの軍事力を誇り、それを神とする。

(6) ハバククは、バビロニヤはいつまでこのような暴虐を働くのかと大いに恐れる。

IV. 神の回答

1. 答えを待つ(1節)

(1) ハバククは神と親密な関係を維持していた。

(2) 彼は、疑問に思うことをそのまま神に伝えている。

(3) 彼は、真剣に神からの答えを待った。

「私は、見張り所に立ち、とりでにしかと立って見張り、主が私に何を語り、私の訴えに何と答えるかを見よう」

①「見張り所」とは、畑の真ん中に立つ見張りの塔。

2. 神の回答(2~3節)

「幻を板の上に書いて確認せよ。これを読む者が急使として走るために。この幻は、定めの時について証言しており、終わりについて告げ、まやかしを言ってはいない。もしおそくなくても、それを待て。それは必ず来る。遅れることはない」

(1) 【主】からの答えは、幻の形でやって来た。

(2) ハバククは、その内容を板の上に書くように命じられた。

(3) 明確に文字で記すことによって、後代の人たちに伝えられる。

(4) それを読んだ人たちは、短時間の内に、次々に隣人たちにその内容を伝える。

(5) 人間の目には遅れているように見えても、それは神の時が来ると必ず成就する。

(6) 神の約束を信じる者たちは、忍耐を働かせて神の時を待つ必要がある。

(7) ハバ2:3は、ヘブ10:37~38に引用されている。

3. 幻の内容（4～5節）

- (1) 高慢な者とは、神のことばを信じない人のことである。
- (2) 神のことばを信じ、それに従って生きる人は信仰者であり、義人である。
 - ①ハバククは、神がなぜカルデヤ人を用いてユダを裁くのか、理解できない。
 - ②神は、最終的にはすべての問題が解決することを信じるように命じた。
- (3) ハバ2：4は、ロマ1：17とガラ3：11に引用されている。

「なぜなら、福音のうちには神の義が啓示されていて、その義は、信仰に始まり信仰に進ませるからです。『義人は信仰によって生きる』と書いてあるとおりです」
- (4) 次に神は、罪深く傲慢なカルデヤ人は必ず滅ぼされると預言される。
 - ①ぶどう酒による酩酊という罪
 - ②貪欲という罪

V. ハバククの祈り（3章）

1. 特に、16～19節

「私は聞き、私のはらわたはわななき、私のくちびるはその音のために震える。腐れは私の骨のうちに入り、私の足もとほぐらつく」

- (1) これまでの預言の内容は、大患難時代、ハルマゲドンの戦い、メシアの再臨。
- (2) それを聞いて、ハバククは恐れ、震えた。
- (3) 人間の力ではどうすることもできないような苦難が、イスラエルの民を襲う。
- (4) ハバクク（信仰者）にできるのは、神の御心が成就するのを静かに待つことだけ。

2. 勝利の祈り

- (1) 大患難時代になると、食物が欠乏する。
- (2) 神に対して疑いを抱いてもおかしくないような状況が訪れる。
- (3) 絶望的な状況の中で、ハバククは祈る。

「しかし、私は【主】にあって喜び勇み、私の救いの神にあって喜ぼう」（18節）

- (4) 逆境が、ハバククを神に近づけた。

「私の主、神は、私の力。私の足を雌鹿のようにし、私に高い所を歩ませる」

結論：ハバクク書の中心的な教えは、2つある。

- (1) 「正しい人はその信仰によって生きる」（2：4）

①信仰者は、理解できないような状況に遭遇しても、神の計画が最善であることを信じて前進する。

- (2) 不可解なことや矛盾に思えるようなことは、メシアの再臨の時にすべて解決する。